

| | |
|------------------|---|
| Title | ギヨウム・ デウ・ リユブルウクに於ける所謂iascot |
| Sub Title | |
| Author | |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1930 |
| Jtitle | 史学 Vol.9, No.4 (1930. 12) ,p.70(602)- 70(602) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19301200-0070 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ギヨウム・デゥ・リュブルウクに於ける所謂 *iascot*

蒙古人の間に使用された銀地金を呼ぶため、ギヨウム・デゥ・リュブルウクは特殊な言葉、その寫本が *iascot* を記し、編纂者及び譯者を途方に暮れさせた言葉を七回使用して居る。

然しその解決は明瞭である、元代に於て銀及び金の地金は、ペルシヤ文の中に於て、^{イヌブト}椅褥 *Coussin* を意味する *Balis* を言ふ名に依て呼ばれて居る。これはこの地金の形を仄めかしたのである。その他元帝國に於てこの地金のかはりとして流通した紙幣を *Balis* *Yau* (*Persan balis* + *chinois* 鈔 *teh'ao* を呼んでゐた、而して元代に恐らく遡るトゥルファン^{トルファン}の土耳其文献は *yastug* 又は *yastug* *Yau* を言ふ表現を用ひてゐる、そして F. W. K. Müller 氏は數年前 *yastug* を *yastug* *Yau* は土耳其語に於てペルシヤ語の *Balis* 及び *Balis* *Yau* の正確なる對語であると言ふことを確實に證明した。土耳其語に於ける *yastug* の普通の意味は、なるほど椅褥 *cousin* である。中世紀の寫本に於て、*Yau* がたへず入れちがふことを想起すれば、次の結論が成り立つ、リュブルウクの文に於て、*iascot* の代りに *iascōc* = *yastug* を讀まなければならぬ、またもやリュブルクの語彙は蒙古語でなく土耳其語であることを確かめる、土耳其語は元朝初期の國際語であつた、フラッグがペルシヤを支配し、帝國の首府が北京地方に移された時初めてペルシヤ語が首位を占めたのである。

Balis 及び *yastug* の場合に於て、この椅褥 *cousin* の表象を土耳其人がペルシヤ人にかりたか、はた又ペルシヤ人が土耳其人にかりたかをはつきり言ふことは易しくない。支那と最も近接せるが故に土耳其人が此處に於て創始者であつたに信じて度くなる。然しミュレル氏に引用されたシリヤ文はペルシヤ人側に傾かしむるらしい、然し椅褥 *cousin* に於て土耳其語とペルシヤ語が他の表象の勝つてゐる蒙古語に相對持してゐると言ふ事を認めなければならぬ。元朝の蒙古語に於て、銀又は金の地金は *sika* 即ち斧と呼んでゐた、此語はこの特殊の意味に於て今日蒙古語に於ては忘れられ然し滿洲語に借りられ、此語に於て地金の名として残つてゐる、一三四〇年の蒙古の碑銘はペルシヤ語に於て *Balis* *Yau* 土耳其語に於て *yastug* *Yau* の如く、紙幣を呼ぶ爲に *sika* *Yau* を用ひてゐる、中世紀に於て椅褥 *cousin* よりも寧ろ斧を想ひ起させるこの地金の形については Rev. des arts asiatiques, II [1925], 10-13 に表れた Bauer 氏の論文及び予の附考及び T'oumy Pao, 1929, 360-361 に擧げられた加藤繁氏の諸研究を参照せられたい。恐らく地金の形及びその蒙古語は、攸久の古代事象の遺存であり交換具に屢々供せられたらしい先史時代の斧——石及び青銅——に遡るかも知れぬ。常に秤目を表はした「斤」といふ支那語が、本來「斧」を意味するとしてもけして偶然ではないであらう(以上ペリオ氏 Pelliot, Le prétendu mot "iascot" chez Guillaume de Rubrouck, T'oung Pao, 1930, p. 190-192 の本文を譯す、原文三附註あり、今之を略す)。